

組合士

アラカルト

日本編レース工業組合連合会

専務理事

いのせ やすじ
猪瀬 安次さん

次代へ向けた胎動を積極的にサポートする

組合トップ組合士

「資格取得が目的というよりも、とにかく挑戦してみたい。自分が実務でやって来たことを整理してみたい。それが組合士に挑戦した理由です」と振り返るのは、2006年に受験・合格された猪瀬安次さんである。猪瀬さんは、全国の産地組合を束ねる日本編レース工業組合連合会（以下、編レース工連）の専務理事でもある。

これまでご登場いただいた組合士さんの多くは組合事務局長など組合職員の立場にあって、組合士は自己研鑽の証という自負と、それゆえ「組合役員・トップは組合士を理解して、評価して欲しい」と願う気持ちが共通して伺えた。

これに倣えば、猪瀬さんは、専務役員として組合トップ組合士と呼ぶことも

できる。そんなお立場にあつて何を思い、何に取り組んでいるのか、お話を伺った。

編レース工業界、編レース工連とは

〃織りと編み〃からなる繊維産業の中で、編レースはニットと共に〃編み〃の分野を担う産業である。業界規模は織りと比較すればきわめて小さいが、カーテンや女性インナーウェアなどの生地を生産する身近な存在である。その高品質を保つには機械や工程の管理が難しいため、生産拠点が中国へ移行してしまった他の繊維産業に比べ、「移行はこれから」と言われているという。

そんな産業の産地組合を束ねる編レース工連は昭和41年に設立され、現在は、広域組合である東日本、中部日本、関西の各編レース工業組合と、単県組合の福井編レース工業組合の4組合、228社

を傘下に収めている。しかし、「3年前には270を数えた同業者数が、今年度内には200社程度になる」というように、転廃業も進んでいる。

組合員向けの事業は、全国中央会の補助を活用した研修事業や、地域資源活用プログラムなどの情報提供とその活用支援が中心であるが、昨年までは一大事業として、綿、絹、毛、ニット、撚糸、タオルの6工連と共に、国内最大の繊維見本市「ジャパパンクリエーション」を主催していた。

青年部が牽引する明日の姿

「各産地組合や工連は、これから組織として新たな構築が必要となる」と猪瀬さんは展望している。10人以下の小規模事業が組合員企業の7割を占める各産地組合は、一つの単独組として独立を維持



するかどうか検討が必要となる厳しい状況も見込まれる。全国組織としての編レース工連もそのあり方の再検討を迫られる。しかし、そんな中にも猪瀬さんは「光明はある」と言う。

「当工連の青年部は産学連携や新技術の開発などテーマを決めて勉強会を開くなど非常に活動が活発です。その中で、〃一緒に生き残っていこう〃という精神が育ちつつある。編レース工連としても、青年部の人材を見守り、顔の見える関係づくり、信頼づくりを積極的に支えていきたい」。

猪瀬さんは、ここに産地組合と工連の新たななかかわりのあり様、運営の希望を見いだしているのである。